１９９５年度

神戸大学
総合ボランティアセンター

年間活動報告書

神戸大学総合ボランティアセンター

神戸大学人社系図

02000025650

震災文庫
7
385

寄贈

震災文庫 7 -335

はじめに

阪神地域をおそったあの前例のない大震災によって、私たち神大生が住む街が崩壊し、近代化された街が自然災害にいかに無力であったかを思い知らされました。そのようななか、微力ながらも、「何かできることはあるのでは」とボランティア活動に参加した神大生がいました。その他、全国から駆けつけたボランティアたちとともに、また地元の住民とともに、様々な活動に神大生は参加しました。彼らの活動が実際にどこまで被災地のために役に立ったかということは、今後冷静に明らかにしていかなければなりません。ですが、神大生の中に大きな社会参加への欲求があることは、明らかになりました。

また、このボランティア活動を通して神大生が学んだのは、震災の被害の深刻さだけでなく、避難所で不自由な生活を余儀なくされていた高齢者や障害者に十分なケアが整備されなかったこと、都市のコミュニティーが不成熟であったために様々な対立が起こったことなど地域が震災前から潜在的に抱えていた問題でもありました。これらの問題を解決するためには、大学と地元がパートナーシップを持って、長期的かつ継続的な取り組みをする必要があるのはないでしょうか。

このような意識を持つ、各分野の本学教官有志と地域でボランティア活動に従事した本学学生有志によって1995年5月10日に「神戸大学総合ボランティアセンター」が設立されました。

神戸大学総合ボランティアセンターはこの１年間「ボランティア活動を通して、地域と大学を活性化させること」を主たる目的に掲げ活動してきました。震災以前は多くのメンバーが「ボランティアは自分にはできない活動」と漠然と考えていました。しかし地震後「何かしたい」という気持ちで始めたボランティア活動が、そのような偏見をうち破りました。またボランティア活動を必要としているところでは強く学生の力が求められているのだということを知りました。そこで学生の力がボランティア活動に活かされるには現場と大学生を結ぶものがなければいけないと思いました。その間に立つ役目を神戸大学総合ボランティアセンターという学内にあり学生が運営する団体が担うことでボランティアに対して高い壁を感じている学生に広くボランティア活動に参加してもらおうと考えました。

これまで私たちは学生ボランティア活動の推進と定着を目指し、情報の公開と収集をしながらボランティアをする個人を大学と地域に有機的に結びつける努力をしてきました。また地域にも開かれたシンポジウム・ゼミなどを主催してきました。果たして私たちの努力がどこまで成果を出したのか？　設立から1年たった今、この活動報告書を通じてじっくり振り返ってみたいと思います。

神戸大学総合ボランティアセンターという名の通り、ボランティアをする個人のコーディネイトとフィールドの運営の両立をするために、メンバー間での意見交流をし、事務機能を整備しながらようやく「ボランティアセンター」としての機能を確立しつつあります。ここまでたどり着くまでに、それぞれのご立場に応じた支援をして下さった皆さまにこの場を借りてお礼を申し上げるとともに、今後も多方面にわたってアドバイスをいただけたらと願ってやみません。

神戸大学総合ボランティアセンター

02000025650

目次

はじめに　3

第１章　センターのこの一年を振り返って　7

第２章　１年間のボランティア活動報告　２７

第３章　研究活動報告　４５

第４章　活動者の感想　５１

第５章　神戸大学総合ボランティアセンターへ　６７

第６章　資料　７５

第７章　ご支援いただいた皆さまへ　８１

第１章

センターのこの１年を振り返って

神戸大学総合ボランティアセンターは設立以来約１年間、様々な活動を行っていきました。この章では、センターとしての総ボラの活動を振り返り、’９６年度にどうつないでいけるのかを考えてみました。

設立からこれまでを振り返って

稲村和美（法・院１／'95年度代表）

1）何をやろうとしたのか

きっかけ

阪神・淡路大震災に対するボランティア活動の多くは、「避難所」という、一種特別な場所を拠点にして行われていた。（もちろんそれ以外の場所でも様々な活動が活発に行われていたが。）自分も何か手伝いたいという思いの下に私たちは避難所に集まり、偶然にも寝食をともにすることとなった仲間達と語り、時には議論しながらボランティア活動を行っていた。たわいのないバカ話や宴会も多かったが、気持ちを同じくして集まった仲間達と過ごす時間は楽しく、それが私たちをボランティアに夢中にさせた大きな要因であったことはまちがいないだろう。ボランティアというものは基本的には個人単位の活動だが、継続していくには、それなりの要素を必要とする。その要素は、時間的余裕や経済的余裕など様々だが、私たち学生にとっては「仲間と語り合える場」を確保できるということが非常に重要な要素である。ボランティアはきれいな部分ばかりではない。いやな思いをすることもあれば、壁にぶつかることも多い。そんなとき共に悩み、語り、経験を共有できる仲間と場所が、やはり必要なのだ。ボランティアで得た喜びも、共有できる仲間がいれば倍増する。また、一人のボランティアの喜びは、落ち込んでいる別のボランティアにとって、何よりの励ましになるだろう。

せっかく避難所に集まったボランティアが散り散りになってしまってはもったいない。恒常的にボランティア同士が語り、励まし合える場所が私たちにとって一番身近な大学内にあれば一。避難所が落ちつきを見せ始め、ボランティアが運営の中心だった避難所の多くも、避難している方々が中心の運営形態に移り変わりつつある、四月の初め頃だった。

サークルでなくセンターを

授業が始まった四月以降、それまで活動していた学内の学生ボランティアグループの多くも解散し、神大生の大半は、震災前の生活に戻りつつあった。みじかな接点が減少し、被災地・被災者の情報は、地元学生である神大生にすら届きにくくなっていた。ボランティアサークルにしか情報やきっかけがない状態では、すでに何らかのサークルに入って、忙しい生活を送っている学生、つまりほとんどの神大生は、ボランティアから遠ざからざるを得ない。多くの学生にとって、サークルを二つ兼ねるのは、時間的に困難だからだ。また、サークルだとどうしても活動内容が統一的になる傾向があり、ボランティアの選択肢が狭くならざるを得ないという面がある。

組織の方針やスケジュールにしばられることなく、自分のやりたい活動やサークルと両立できる形で、ボランティア活動ができるような環境が整わなければ、「ボランティアをやってみたいと思ってはいるけれど、実際にはできない」学生が増える一方だ。組織に拘束されない個人単位でのボランティアを実現させるためには、サークルではなく、「センター」が必要だと思われた。必要だと思われるものが存在しないのなら、自分たちで作るしかない。私の他、経営学部の四回生と２人の院生の合わせて四人の学生が発起人となってセンター設立に向けての準備が始まった。

センター設立へ

私たちは、「神大生のボランティア活動におけるハブセンター」の設立を目指して、本格的に動き始めた。ハブセンターというからには、神大生のグループ単位での活動の状況を把握するとともに、学外のボランティア団体の活動情報を整理して、情報の一元化を図らなければならない。そこでまず、震災直後から学内で精力的にボランティア活動を続けていた「神戸大学学生震災救援隊」等のグループや、有志の先生方とともにセンター設立会議を重ね、枠組みを作っていった。そういった動きの中で、有志教官による「アドバイザー委員会」が構成され、ボランティアセンターは、五月十日に「神戸大学総合ボランティアセンター」として、正式に設立されることとなった。

センターの活動目的

私たちは、センターの活動における柱として、大きく分けて二つのことを考えていた。一つは、コミュニティーのニーズに応え、マンパワーを提供すること。もう一つは、大学生という立場を活かしたボランティアを考えていくことだった。

第一の目的であるマンパワーの確保は、全国からのボランティアが一時に撤退してしまったその時期の急務課題だった。しかし、神戸大学総合ボランティアセンターは、震災救援だけを目的に作られたセンターではない。ボランティアを始めた当初こそ、自分はみんなで楽しくやれる避難所でのボランティアはできても、地道で継続的なボランティア活動に同じように夢中になることはできないないのではないかという思いもあったが、この頃には、災害ボランティアと福祉的なボランティアを全く切り離して考えることこそナンセンスだと感じるようになっていた。被災地で最も必要とされ、また最も重要な貢献を果たしたものは人としてのつながりだった。それは普段のコミュニティーにおいても同じではないだろうか。設立のきっかけは震災であったものの、ボランティアセンターは救援活動に限定しない、むしろコミュニティーセンター的なものを目指して形成されていった。

しかし授業が始まり、震災のインパクトが刻々と薄れていく中で、マンパワーの確保と簡単にいってみても、一筋縄ではいかない。先にも触れた通り、大学生は何かと忙しい。「ちょっとやってみたいなあ」という程度の軽い気持ちでは、なかなか実際に活動するところまでたどり着けないことが多いのだ。しかしきっかけさえあれば実際にボランティアをするであろう学生はたくさん存在する。今回の地震で動いたボランティアの数は、被災地という特殊性はあっただろうが、気軽にできて気軽にやめられるという条件がそろえば、震災前より多くの学生がボランティアに関わるであろう可能性を感じさせた。

そこでセンターでは、常にニーズに関する情報をプールし、いつでもフィールドを紹介できるようにすることになった。この震災におけるボランティア活動の多様性を参考に、自分に合ったボランティアをしてもらえるよう、フィールドの選択肢をなるべく多くした。　私たちがコーディネート、もといローテーションの作成を担当することで、断りきれないニーズに無理を重ねるということのないようにし、気軽に、自分が関心を持てるボランティアに参加してもらえるようにすることが目標だった。

第二の柱である「大学生としての立場を活かしたボランティア」は、発起人のボランティア活動のなかでの実感に基づいて形作られていった。

私自身が避難所でのボランティア活動を通じて一番新鮮だと感じたのは、自分が今まで大学の机の上で学んできたことが、本当に自分の生活の場、すなわち社会につながっているのだという実感だった。もちろん頭のなかでは分かっているつもりでいたのだが、今回のようにそれを「肌で感じた」というのは初めての経験だった。建築関係や地質学を筆頭に、法律、経済、心理学、あらゆる分野を今までになく身近に感じた。特に自分の専攻分野以外のことへの関心が以前とは比べものにならないくらいに深くなった。活動のなかでいろいろな学部の学生と出会い、時には何かを教えてもらったり、時には自分とは全く視点の違う物事の捉え方に驚いたりした。そして自分が学んできたことが少し役にたったという喜びともっと勉強しておけばよかったという気持ちを同時に味わった。

また、今までいわゆる「社会問題」として何となく捉えてきた様々な現象を、実感を伴った状態で考え直すことができる機会を得たと思う。一億総中流の幻想や高齢社会、障害者の方の問題といった福祉の問題、縦割り行政の弊害などを目の当たりにした時、今までの社会がいかにうまくいろいろな問題を隠蔽してきたのかということを痛感した。今回の震災が生じさせた問題ももちろん多かったが、結局は地震の前から存在していたのに見えなくなっていた問題が、地震によって顕在化したにすぎないのだというのが私の印象だった。今回の地震で私たちが払った犠牲は大きかったが、この地震が私たちに教えてくれたことは決して自然の恐ろしさだけではなかったはずだ。この地震から学ばなければならないと、本当に心から思った。そして、学んだことを今後神戸からしっかりと発信していかなければならないということも。

このような思いから、「ボランティア活動を通じて見えてくる社会現象を学際的に研究し、その成果を自分の大学での学術活動に活かす」という、第一の目標以上に高い目標ができていった。神戸大学は総合大学であり、そこには様々な関心と専攻を持つ学生がいる。専門的な話は分からなくても、ボランティアの合間にかわす雑談のなかでこそ、意外といろんなことが見えてきたり、きっかけを得ることができたりする。

およそ研究というにはほど遠いが、週に一回レジュメ発表者を決め、勉強会を行うことにした。活動を通じて疑問に感じたことや問題だと思ったことを、みんなで勉強し、それを次の活動に活かしていく。また、活動を通じて身につけた視点を自分の勉強に活かしていく。それがうまく循環していけばという思いからだ。避難所の問題点や、仮設住宅の問題、子供のストレスの問題など、毎回違うテーマを取り上げ、意見を交換した。

今回の震災で学生ボランティアがスポットを浴び、単位の認定やボランティアによる公欠の承認などが話題になった。確かにこのような形でのボランティア支援も検討されていくべきだろう。しかし、学生が本来の大学での学術活動をおろそかにしてまでボランティアをするというのであれば、それもおかしな話である。ボランティア活動をしていると、本当に様々な社会の矛盾、コミュニティーの問題点にぶちあたる。もちろん背後にある様々な問題に無関心でいることは簡単だ。一人でどうこうできるわけではないので、むしろその方が自然かもしれない。しかしそれでは、私たちが大学で学んでいる、もしくは学ぼうとしていることは一体何なのだろうか。

現在の大学での勉強は分化が進んでおり、得てして机の上の勉強に終始しがちである。自分がしている勉強が、社会のなかでどのような位置を占め、具体的にそのように関連しているのか、見えなくなってしまうことも多い。

大学＝モラトリアムというイメージが定着して久しいが、学生は、自分が手に入れた四年間の過ごし方をじっくり考え直してみる必要があるのではないだろうか。社会に出て様々な問題を肌で感じても、その時に学生時代のような条件はそ

ろっていない。ボランティアは人との出会いであり、まさしく社会に関わっていく行為だ。大学生に、もっと社会に関わる機会を提供したいというのがセンターの意図だった。

2）何ができなかったか

学内ハブとして

総ボラの設立当初は、先述の通りいくつかの学内ボランティアグループが存続しており、震災前から活動しているグループも含めて、それらの調整役になるというのが総ボラの目標の一つだった。しかし、初年度は総ボラそのものの足場を固めるのに精一杯で、とてもそこまでできなかったというのが実状だ。ネットワークというものは、実際の必要性から何かを一緒にやったり、活動のフィールドで培った人間関係から形成されていくもので、ただ看板を上げただけでは何の実質的なつながりも生じない。他のグループとのコミュニケーションも十分ではなく、具体的な共同企画を提示することもできないままに一年が過ぎてしまった。内部のことに気を取られ、他の学内グループを振り回すようなことになってしまい、大変申し訳なく思っている。この場を借りてお詫びしたい。申し訳ありませんでした。

サークルでなくセンターを

総ボラは、サークルのように固定的なものではなく「出入りが自由な場所」としてのセンターを目指して設立された。しかし、初年度に関しては、全面的にこの目標を達成することができなかったと言っていいと思う。

まず第一に、結局最後まで学内での知名度を挙げることができなかった。根本的な原因としては、広報力の不足。そして、メンバーがあまりセンターでの活動を自分の周りの人間に話すことができなかったということも原因の一つだと思う。震災を契機にボランティアという言葉が身近になったとはいうものの、自分がボランティア活動をしているということを周りの友人達に話しにくいという傾向は強かったようだ。さらに、そのような状況に対して「ボランティア活動の推進」を目的とする総ボラの内部で何等の話し合いもなされなかったということが最も重要な問題点であったと思う。第二に、結局人間が固定化され、サークル的な雰囲気が強くなるにつれ、センター内部の空気が「内輪」のものになり、新しい人もしくはあまり頻繁にはセンターに顔を出さない人が入って行きにくい状況を生み出してしまった。これは、後述する「センター内におけるコミュニケーションの不足」という問題にもつながる。ある程度は避けがたいとはいえ、センターの性格がメンバーに徹底されていなかったことが大きな原因であると思うので、発起人として、説明が不足していたと反省している。初期の頃はともかく、少なくとも夏以降、メンバー一人一人ともっとじっくり話す時間を取るべきだった。

コーディネート

総ボラにおいて「コーディネート」というときには、次のようなことを想定していた。つまり、①新しい人がフィールドに出るときに、現場での混乱や不効率を避けるため、予め簡単な説明や注意をしておく。

②一人の人間が無理をすることがないように、ローテーションを組み、都合が悪くなった人の日程を調整する。という主に二つのことだ。二つともほとんどできなかった。原因は、そもそもコーディネートする個人会員の数が絶対的に少なく、結局内輪のメンバーで活動を行っていたことにつきると思う。しかしそのような少人数であっても①が徹底されなかった。そもそも「体験の共有」という意識が薄いまま一年間が過ぎてしまったように思う。時間が無かったと言えばそれまでだが、「とにかく活動する」ということに気をとられ、肝心な部分がないがしろにされてきた。

震災時のように緊急にやらなければならないことが山積みの状況ならともかく、誰しも最初にフィールドに出るときには、戸惑いや不安、絶対的な情報の不足がある。先入観を植え付けるというのではなく、少なくとも私たちがどのような考えに基づいてその活動をしているのかということは説明できないといけなかったと思う。そのような前提が弱かったために、自分たちの活動に関する検証も不十分になってしまった。

セクション間の分断

なるべく多様な活動を取り込み、その上で全体的な問題に対して総合的な考え方ができるようになりたいというのが総ボラの方針だった。コーディネートの関係もあって、総ボラでは夏以降、活動の種類およびフィールドごとにセクションが分けられた。

この方法は、セクションごとにリーダーも形成され、当初は比較的うまくいくように思われた。しかし時が経つにつれ、セクション間の溝が大きくなってしまった。自分が所属していないセクションが何をやっているのか分からないという以前に、多くのメンバーが自分が受け持つセクションのことで手が一杯になり、他のセクションに対する関心そのものが薄れてしまっていたように思う。結果として総ボラの内部でセクション同士が限られたマンパワーを食い合うような事態にまでなってしまった。総ボラ全体としての計画性が乏しく、調整ができていなかった。メンバーの数がそう多かったわけではないので、セクション同士が完全に分断されることはなかったが、セクションを超えた全体のつながりを実感できていたメンバーはひとにぎりだと思う。スケジュールの組み方だけでなく、ここでもやはりコミュニケーションの不足が大きな原因だったと思う。

問題意識の共有

総ボラの最も根元的で最大の課題は、問題意識の共有が不十分だったことだ。センターが何をどのような問題として捉え、それに対してどのようなアクションを起こそうとしているのか、そのつながりが多くのメンバーに承認されていなかった。繰り返しになるが、当然のことながら、これでは自分たちの活動を検証することができない。

年末あたりから少しづつメンバーの意識も高まってきたように思えたが、私自身の反省としては、自分の問題意識が完全に整理されていなかったことに加えて、「あまり抽象的なことを言い過ぎるとメンバーがしんどくなるのではないか」といったような、ある意味非常に傲慢な感覚をメンバーに対して持っていたのではないかと思う。メンバー一人一人が、常々口にすることはなくても、確実に様々な経験を自分の中に蓄積していたにも関わらず。

相手の話を聞き、本当に自分の考えを相手に分かってもらうということは、思うよりもずっと難しいことだ（と思うのは私だけじゃない・・・はず）。センターの運営の中心にいた私が、「メンバーの中に漠然とでも形づくられてきているものに耳を傾け、みんなでそれを具体化していこう」という態度に欠けていたことは、大きな問題点であり、今後の自分にとっても最大の課題だと受け止めている。

研究活動

センターの柱の一つであった研究及び勉強に関しては、運営に関する反省以上に多くの反省点がある。まず第一に、「とにかくそれらしいことをしなければ」というある種の焦りがあったのではないかと思う。全体として必要に応じて勉強がなされていくというよりは、企画が先行することが多かった。

週に一回の勉強会（ミーティングの際に色々な活動経験者を呼び、その人を交えて現状の問題点の把握や意見交換をする形式）に始まり、それが小さな勉強会（関心分野を同じくするメンバーどうしが集まり、自主的に勉強する形式）となり、企画としては総ボラゼミ（アドバイザーの先生を中心に、ゼミを行う）を２回行った。

小さな勉強会があまりできなかったのは、時間的な制約が大きかったからだと思うが、総ボラゼミはまさしく企画先行という感じで、メンバーの中でも関心を示す人とそうでない人が二分してしまったように思う。

運営に関する反省に書いたように、問題意識の共有自体が不足している状態では、勉強しようといってみても空回りになりがちだった。ただ、いくら問題意識があっても一人の人間がもてる時間には限りがあるので、どちらかというと勉強・研究に力を入れるメンバーが形成されてもいいのではないかと思っている。知らないこと、知りたいことを積極的に調べていけるセンターでありたいという思いは今も変わらない。

３）今後に向けて

全体を通して、この一年の総ボラの反省を貫いているのは、「コミュニケーションの不足」だと思う。センターは性質上、様々な種類、段階のコミュニケーションを確保していかなければならない。運営スタッフ、ひとつのセクションのメンバー間、セクションとセクション、個人会員同士、スタッフと個人会員、そしてボランティアセンターに関わっていない多くの人と私たち。

このような冊子を作ろうという話がではじめた冬頃から、少しづつ、けれど確実に今まで後回しにしてきた根本的なセンターの課題がメンバーの間で話題にされるようになり、一歩一歩前進していると思う。それぞれの場面で、メンバーの意識的な場づくりと、具体的なアイディアが必要だ。少なくとも現時点で、その必要性は中心メンバーに共有されていると思う。昨年はそれすらできなかった。今年度こそ、みんなが頭の中で考え始めたことを具体的な形で行動に移していく一年だと思う。

「総合ボランティアセンター」という枠組みは、私たちにとって道具であり、手段だ。それを維持することが目的になってしまったら本末転倒になってしまう。「センター」を通じて私たちは何をやろうとしているのか。本来ならばこの部分こそがこの冊子のメインでなければならないのだが、今回は時間が間に合わず、とりあえず運営面での反省を中心に暫定的に冊子を発行することになった。

新しいメンバーを含めて、私たちがやろうとしていることの確認を積み重ねていかなければならないと思う。

このあとの流れ

1 -はじめに

2 -目標の確認

3 -活動内容の検証

1 ーボランティア活動のための環境整備
1）ボランティア保険に関して
2）福祉的技術のレクチャーなどについて
3）交通費補助について
4）コーディネート業務について

2 ーボランティアの活動内容向上
1）大学当局に公認された活動場所の確保
2）反省会などを組織だって整備・運営する必要性
3）質的な記録の整備

3 ー研究・企画
1）共同研究会・総ボラゼミ・小さな勉強会
2）イベント企画

4 ーボランティア活動のＰＲ
1）秋のキャンペーンについて
2）ニュースレターについて

4 -全体を通しての反省
～組織運営という概念の欠如～

1-はじめに

昨年・5月10日、震災をきっかけに「ボランティア」というキーワードに可能性を感じた神大生・教官たちが集まり、たいへんに情熱的な雰囲気のもと、総合ボランティアセンターを設立しました。

それから一年を経た今、その情熱の結晶がいかなるものとなったかを、運営にたづさわったもので検証してみようというのがここでの試みです。

ただ、すでに設立当初のメンバーは就職や海外留学などにより非常に集まりにくい状況にあるということもあって、昨年の活動をそもそも始めた者が一年間の反省をするという形を実現することはできませんでした。

また、私たちが対外的・対内的に犯したであろうたくさんの過ちに関して、その責任・理由・原因を明らかにするという、活動の反省として大変大事な面が、明確でない反省になってしまいました。これは、「私たちは何に対して、何処まで責任を負うのか、あるいは負えるのか」ということに対して、そもそも組織的なコンセンサスを形成していなかったということに起因します。であれば、それをこそこの場で明確に発表すべきですが、それを具体的に話し合う時間が、私たちには不足していたのです。

不十分ながら過去を振り返った過程で、設立者たちの情熱は、いまだ明確な使命・計画・組織に結晶していないと言うことをメンバー一同が痛感いたしました。

非常に中途半端で断片的な反省ではありますが、私たちが進むべき方向を定めるためのステップとして、ここにまとめさせていただきました。

さらなる反省のための機会を今後もとりつづけることを誓いつつ。

平成8年5月11日
神戸大学総合ボランティアセンター

代表　喜多　真理子
副代表　藤室　玲治
　　牧　壱世

2-目標の確認

昨年５月１０日に発足して以来、そもそも神戸大学総合ボランティアセンターは、なにを目標として活動していたのでしょう。今回の反省に先立って、運営局内でまず「我々はこの一年、何を目標としていたのか」ということを確認することにしました。ただ「初めに」に書いた事情の通り、設立当初のメンバーはほとんどおらず、正確に一年間活動をしていたメンバーは運営局内でも極少数です。そのため、設立に関わった初期のメンバーたちが書いた、各種の文章を利用しました。

設立準備段階で用意された趣意書の中に「被災地の中心に位置する総合大学としてボランティア活動を通して、地域および大学の活性化を図る」という大きな目標が掲げられていました。大目標としては、その通りであろうと意見が一致しました。そのために、もうすこし具体的な目的として私たちが「活動案内」などで掲げていた目的、つまり

> １、一人でも多く学生にボランティア活動をはじめるきっかけを提供し、その活動の継続性を確保するためのコーディネート業務を行うことによって、学生として地域において一定の役割を果たす。
>
> ２、ボランティア活動によって得た体験・視点・情報をメンバー間で共有する。
>
> ３、以上の活動を通じて自己の問題として捉えた社会現象を学際的に検討し、その成果を大学における研究、ひいては地域での活動に還元する。

があるのだろうという話になりました。

しかし、ここで１・２に関してはわかるが、３の部分に関しては、これまで活動してきて実感として良くわからないし、そもそも文意が不明確であるという話になりました。設立当時は大学での研究活動とボランティア活動をつなげるという構想が協調されていたためにそのような表現となったのでしょが、なにも研究活動という形に限定せず、地域の人と合同のイベント開催などでも、日頃の活動を総合・発展させ地域に貢献する契機となるだろうと考えてきていたということで、以下のように書き直しました。

> ３、以上の活動を通じて得られたものを企画・研究などの機会を設けて総合・発展させ、大学・地域に還元できるものを作り出す。

また、「若い内に様々な社会参加をボランティアという形で経験することによって、よい社会人となることを目指す」というようなことも目標として掲げてきたのではという意見がでました。ボランティアというのがそのような教育効果をもつものだということは、過去に総ボラのいくつかの文書の中にも見られる考えでありますし、現在の運営局員もそう思っているのですが、あくまで活動を通して各人が実現すべき問題で、組織目標として掲げなくても良いのではという意見に落ちつきました。

全体として十分時間がとれず、不十分な議論ではありますが、以上が昨年の目標確認でした。また今年の目標も同様のものとしていくことになりました。

3-活動内容の検証

「2-目標の確認」の所で述べたように、昨年5月10日に発足して以来、神戸大学総合ボランティアセンタは、

「被災地の中心に位置する総合大学としてボランティア活動を通して、地域および大学の活性化を図る」

という大きな目標をおき、そのために以下の目的を掲げて活動してきました。

> **1、一人でも多く学生にボランティア活動をはじめるきっかけを提供し、その活動の継続性を確保するためのコーディネート業務を行うことによって、学生として地域において一定の役割を果たす。**
>
> **2、ボランティア活動によって得た体験・視点・情報をメンバー間で共有する。**
>
> **3、以上の活動を通じて得られたものを企画・研究などの機会を設けて総合・発展させ、大学や地域に還元できるものを作り出す。**

これらの目的を果たすために次の4つを活動内容としてきました。この活動内容の区別は便宜的なものです。適切な分け方かどうかは議論の余地のあるところですが、今回はこれを反省のためのガイドラインとして採用しました。

1）ボランティア活動のための環境整備
2）ボランティアの活動内容向上
3）研究・企画
4）ボランティア活動のPR

それぞれの項目に当てはまるであろうと思われる事柄を挙げ、それについて現在の運営局員で話し合い、それらの活動が昨年度1年間、果たして効果的に行われていたのかどうか、行われていなかったならなぜそのようになったのかを考えました。そしてこれらの反省点を含む自己評価を通して、今年度はどのように活動していけばよいのかを以下のページにまとめました。

1－ボランティア活動のための環境整備

個々のボランティアが長期的かつ円滑に活動するためのコーディネートを行うと同時に、ボランティア保険や福祉的技術のレクチャーなどを提供することにより、安全かつ効果的に、学生がボランティア活動に従事できる環境を確保する。

1）ボランティア保険に関して

ボランティア保険に関しては、昨年度は１０月になってやっと全員加入を果たしました。加入手続きはセンターが代行することになっているにも関わらず、このように遅くなってしまったのです。その理由としては以下のようなことが考えられます。

a）活動する会員に滅多に会わないので保険代が受け取れなかった。また設立直後の時期であり、立て替える資金がセンターになかったこと。

b）センター内で、保険の代行手続きを責任を持って行う担当者が決まっていなかったこと。

☞対策

夏休みの活動を終える頃に運営局制度を導入したことによって保険の加入を代行する責任者が決まりました。また資金に関しても、各方面からの寄付が集まり立て替えることも可能になりました。そのため今年度は個人会員も速やかに保険に加入出来ています。

2）福祉的技術のレクチャーなどについて

活動者に対するレクチャーは、センターが主催することも他団体主催の講習会を紹介することもしていませんでした。特に障害者福祉に関しては技術がいる場合が多くこのようなレクチャーは必要であったかもしれないのですが、実際に介護にはいる会員がほとんどおらず、講習会を必要とする学生がいなかったのです。

☞今年度は

ただ、今年度に関してはコーディネートを行える状況になったので、講習会を必要とする会員が増えると思われます。センター自体が講習会を主催することは負担が大きく、そのため効果的に行えるとは思われないので、他団体主催の講習会を利用するようにしたいと思います。

3）交通費補助について

交通費補助を行いたいとの希望はあったが、実際はいっさい行えませんでした。その理由として、

a）交通費補助を行えるくらい収入が安定していなかったこと。

b）具体的に如何なる形で、誰が、行うかという制度が不備であったこと。

などが挙げられます。

「熱心に活動したら、交通費がかかって貧乏になった」という声が昨年は聞かれました。このように交通費補助はボランティア活動を継続していくためには必要でだろうと考えられるので、今年度は行う予定です。

とりあえず、財政的な目処はたったので、制度の整備が急務なります。

4）コーディネート業務について

コーディネートに関しては、殆どボランティア活動に参加しなかった多くの会員を生じさせたことが最大の反省点です。せっかくボランティア活動に興味を持ってセンターに登録してくれた学生に適切にフィールドを紹介できませんでした。その理由として考えられるのは、個人会員を大々的に募集した設立当時は運営局制度はなく、コーディネートする人とされる人の境目が曖昧であったことです。そのため自己の役割としてコーディネートを認識していた人は少なく、センターとしてコーディネートを組織的に行えなかったのです。

今年度は新入生が多く入会したが、こちらから担当者が連絡をとり、彼らの意欲を現場に結びつけるよう活動をしています。

2－ボランティアの活動内容向上

ボランティア活動によって得た体験や視点、情報を共有する機会を設け、学生によるボランティア活動の向上を図る。

1）大学当局に公認された活動場所の確保

ボランティア活動をした学生が互いの体験を話し合う場を提供するために、固定の活動場所が学内に得られたことは嬉しいことです。学内の事務所を確保できたお陰で、休み時間や事業の空きコマなどにも人がたまってコミュニケーションをとることができるようになりました。

運営面でも、授業やバイトの合間をぬってのことですので、学内事務所でなければ今のように仕事をこなすことはできなかったでしょう。

2）反省会などを組織だって整備・運営する必要性

設立当時はボランティア活動をしている人間が集まれば自然に活動に関する会話になると甘い見込みを持っていたのですが、予測を裏切り、意見を交換する場と機会、また参加者の関心・体験に応じた議論の筋道の設定をしないと話し合いというのは進まないことが分かってきました。

☞今年度からは

今年からは各セクションレベルで活動の後は反省会を設けるようにしています。また障害者の介助のように一度の活動で、一堂に会する機会をもてないようなものに関しては、連絡帳などで事務連絡の他、活動の感想や反省を記入してもらうように今年からしています。

また普段はボックスに顔を出せない個人会員には意見交換会の機会を設けていかなければいけないと思われます。月に１度ほどのペースで実現させていきたいと思います。

3）質的な記録の整備

設立当時から、各自のボランティア活動の報告・反省などを記録として残そうと言うことは言われていたのですが、昨年は日々の忙しさにかまけて、多くの活動に関して、文書として体系だった記録が残りませんでした。「誰が、いつ、どこで、何の活動をしたか」という、（助成金申請などの必要性から）組織の維持に最低限必要な記録はかろうじてとっていたものの、個々の現場での試行錯誤や、活動を終えての評価・反省という、後輩にとって重要なデーターとなる記録が残っていないのです。

原因としては以下のようなことが考えられます。

a）スタンドプレイヤーが多く、その個人の独断によって仕事が進むことが多く、情報がその個人だけに蓄積されてしまうこと。

b）情報を運営局に蓄積すると言うことに関して、メンバーの意識が低かったこと。

c）反省や評価の仕方について、センター全体で体系だったフォーマットがあまり練られていなかったこと。

2と関連することですが、意識的に活動を反省し、記録する機会をセンターの活動全般に関して持っていかなかければなりません。

また定期的に過去の記録をまとめ、長期的な視野で総ボラの活動を点検する作業を行うことも必要でしょう。

3－研究・企画

地域社会における実践活動を通して得られた問題意識をもとに、各種の研究・企画を地域の人々や大学教官と共に進め、大学あるいは地域に貢献できるものを作り出す。

1）共同研究会・総ボラゼミ・小さな勉強会

（これらの詳しい説明については第3章参照）

個々の企画は運営局員の刺激になると言うことで一定の効果がありました。しかしこれらを一つの流れと捉え、総合的にまとめることはできず，大学における研究また地域での活動に還元できるという成果を上げるにはほど遠いレベルに終わりました。

詰まるところ、すべて忙しい活動の片手間でやっていたことなので、断片的に終わってしまったのです。このような研究活動をアドバイザー委員も十分に巻き込んで、深く体系だって展開するために、大学院生などを中心とした専任部門が確立することが必要でしょう。そのさいにこの部門に求められる役割は、上から知識を押しつけるのではなく、参加者が自主的に問題意識を体系立てる手伝いをすることです（このような役割をファシリテーターと呼びます）。

2）イベント企画

大和公園などでは、自治会の方と共同でいくつかのイベントを催したが、それ以外に主体的になんらかのイベントを行うことはしなかった。だがイベントは1）日々の活動の区切りになり、2）やった後の手応えがはっきりしている、3）メンバー間また学生と関わった地域や大学の関係者との連帯感が生まれ日々の活動にもプラスになる、など色々な効用があると思われるので、今後は無理のない範囲で小規模なものでも良いから企画していきたい。

また今年度から実行委員会に参加するNADA Challenge（地元の八幡神社でのお祭り）は地域との交流が行われる場であるので，十分に活用し私たちの活動を地域と密着したものとしていきたい。

4－ボランティア活動のＰＲ

ニュースレターの発行や、シンポジウムの開催を通じて、我々の持つ問題意識を大学を含めた地域社会に訴え、また我々の事業や我々が共感する各種のボランティア活動・社会運動に関する理解と共感を広くとりつけていく。

1）秋のキャンペーンについて

１１月に開かれた六甲祭にあわせて、秋のキャンペーンを行ない個人会員を募集しました。この時はＰＲ不足のためほとんど個人会員は増えませんでした。キャンペーンの中心的なメンバーが大学への公認申請に関する諸事務に追われていたことや、公認の活動場所が確保できていなかったことが原因です。

しかしもしＰＲ活動が成功したとしても，秋の時点では継続して活動できるフィールドは少なく、新しく入会した人にうまくコーディネートできなかったと思われます。秋のキャンペーンは失敗に終わりました。しかし、一方でニュースレターの発行・活動案内の作成・総ボラゼミの開催が行われ、そのほかコーディネート業務の可能な運営の体制が整えられるなどセンターの運営に関して前進をみました。

2）ニュースレターについて

昨年度は、１０月、１２月、２月の３回、ニュースレターを発行しました。部数はそれぞれ３００部ほどです。主に学内に配付しました。最初の１０月号は、単なる「総ボラのパンフレット」といった内容に止まりました。１２月号、２月号ではそれを反省し

それぞれのフィールドでの活動の元となる問題意識や、総ボラ自体の事業からは離れた地域の問題、他団体の活動などを情報発信していくという志で作ってきましたが、それにしては非常に中途半端な出来であったことは否めません。

「内容が難しくて、実は総ボラ内部の人もあまり読んでない」という非常に「寒い」意見もあります。この場合の「難しい」とは内容が高度であるということでは無く、記事の記述が舌足らずで体系だっておらず、レイアウトも読む気を起こさせる工夫に欠けていたためにそう思われたと捉えるべきでしょう。

より具体的に、上記の反省点を細かに検討する作業を早急に行った上で、新しい形のニュースレターを目指そうと思います。

全体を通しての反省
～組織運営という概念の欠如～

昨年度は設立した年だったのもあって基本的な運営ができなかったことに多くの反省点があります。そもそも、設立当時は「組織運営」という概念自体が希薄で、ボランティア活動を希望する人と地域のニーズを単純に集めさえすれば、ボランティアセンターができあがるという非常に甘い考えがありました。

組織の見かけ上の規模に比べ、メンバー間の話し合いが少なく、大変に無方針な活動が多かったこと。具体的な組織の形態に対するビジョンを練るのが遅く、一部のメンバーに仕事が集中し、運営が滞ったこと。そしてその結果、ボランティア活動に興味を持っていた学生にうまく活動場所を紹介できなかったこと。そして地元のニーズに十分に応えられなかったこと。総じて、総ボラという組織の目的である「ボランティア活動の推進」を組織的かつ効率的に行うことは、全くできていなかったと総括しうるでしょう。

「震災でもりあがったボランティア熱をさますな」と、大変なあせりの元、センターの設立は急がれました。その結果、見かけだけの組織が誕生し、それが内外にあらぬ期待を抱かせ、十分に応えることのできない結果となってしまいました。これは、今後より厳しい反省が求められる所です。

しかし、１年間試行錯誤し得たこれらの失敗の経験は私たちの糧となっていることをメンバーは感じています。我々の意欲と能力、可能性に関して、もはや設立当時ほどの幻想と不安をいだいてはいません。

限られた時間の中、数え切れないほどの失敗を一つ一つあげていくことはできませんでしたが、今年度はこれらの経験を体系立て、組織化し、活動をしていかなければいけないと強く感じています。

第２章

１年間のボランティア活動報告

この章ではこの１年間に参加したそれぞれの活動について活動内容を報告します。そしてその内の主な活動については，私たちがその活動のなかでどのような役割を果たせたのかを考え報告します。

なお、時間不足のため、いくつかの活動についてはまとめることができませんでした。また記述の形式や分量についても、統一を欠いたものとなってしまいましことをお詫びしたいと思います。

☆子どもに関わる活動☆

●生田川児童館での活動（現）

震災後子どもと遊ぶことで傷ついた子どもの心のケアをしていたグループ「すまいる」の「子どもと遊び隊」からの依頼を7月に受けたのをきっかけに中央区にある生田川児童館での活動を7月から開始しました。

♪活動の内容

参加者の都合の良い土曜日の午後2時から5時まで児童館周辺からやってくる子ども達と遊びます。

児童館では先生方が毎週土曜日には何らかの企画を立てていらっしゃるので、そのお手伝いもします。カレンダー作り、お菓子作り、風船遊びなどがありました。

他は児童館のプレイルームでトランポリンをしたり卓球をしたり平均台を使って遊んだりします。遊びのアイデアは子ども達がどんどん出してきてくれるので、私たちが考えることはありません。

児童館にあるボードゲームでも遊びます。ボードゲームはかなりたくさんの種類があり、私たちの子どもの頃にはなかったゲームもあるので楽しめます。

天気のいい日は児童館の脇にある公園で鬼ごっこやバトミントンやサッカーをすることもあります。

子ども達は放っておいても勝手に遊ぶので、私たちはけがをしないように気を配ったり、ルールを守らない子を注意をするなど「お兄さん」「お姉さん」として子ども達と遊んでいます。

♪活動を振り返って

活動に参加し始めた頃は子ども達が震災によりどれだけのショックを受けているのかとても不安でした。しかし、活動に参加し子ども達に会ってみると、震災の影響が予想外に少ないこと驚きました。

「すまいる」の方からよくいわれたのは、「子どもと一緒になって遊んではいけない。遊ばせているんだということを忘れないように。」ということでした。活動を通して考えていたのは先生や親のように権力的でなく、また同級生でもない「大学生」ならではの接し方があるのではないかという事です。同世代に限られない人間の交流をこの活動を通じて行っていきたいと思ってきました。

♪参加者が少なかったことが残念でした。

センターの会員でボランティア活動をしていた人が少なかったこともあり、生田川児童館の活動に参加した人も限られたメンバーだけでした。（この少数の参加者は子ども達に顔を覚えてもらうなど、深い関わりを持てたので良かったと思います。）時期によってはほとんど児童館に足を運ばないときもありました。センターの会員が増え、うまく活動にはいってもらえるようになれば、児童館の協力も得られるので、イベント企画をしていきたいと思っています。

・活動日数：１１日（７月２９日～１２月９日）
・活動人数：のべ２２人（実人数７人）

●「京都わんぱくクラブ」

９５年の夏休みには、京都商工会議所青年部の主催する「京都わんぱくクラブ」の第３班（北淡町の小学３年生から６年生までの被災児童が７０名が対象）に参加。

・活動日数：３日（８月８日～８月10日）
・参加者数：のべ１８人（実人数６人）

●岡本信愛幼稚園

仮設住宅の建設などで公園が子どもの遊び場として使えなくなっている状況を受けた教育委員会からの要請で、土曜日に園庭を開放していた岡本信愛幼稚園で子どもの遊び相手をしていた。教育委員会からの園庭開放の要請期間の終了に伴い、活動終了。

・活動日数：５日（11月25日～96年３月９日）
・参加者数：１４人（実人数６）

●「白百合の会」（現）

神奈川県のボランティア団体「白百合の会」に協力し、絵画展を開く計画が現在進行中。

◇避難所での活動◇

●成徳カフェ

「国境無き医師団」及び同志社大ボランティアグループの活動を引き継ぎ、成徳小学校避難所内でのカフェ運営の手伝いを行った。その後、運営が住民主体になり、活動終了。

・参加日数：７日（９５年５月２５日から６月９日まで参加）
・参加者数：のべ１２人（実人数：１０人）

●「カフェ・ツモロー」

カフェTOMORROWとは、青陽東養護学校避難所（神戸市灘区岩屋北町６）の東玄関で７月１５日～８月２３日（３２日間）の間、私たち神戸大学総合ボランティアセンターが運営をしたカフェテリアです。

“TOMORROW”とはカフェの開始前に住民の方から名前の募集をし、唯一応募いただいたものです。私たちは「カフェが明日を考えられるような場所にしい。」という思いにぴったりだといって、とても気に入っていました。

☞カフェの様子

定休日（火曜日、８月の中旬より火・木・日曜日）を除き、毎日午後６時から午後９時（８月はじめより午後８時半まで）の間運営をしました。カフェにはおよそ２０席の椅子と３台のテーブルを用意しました。そのうちテーブル２台を校舎の外に設置し、１台は屋内に設置しました。屋内は禁煙だったため、住民の方は屋外の席を主に利用されていました。屋内の席はボランティアと子供達が使っていることがほとんどでした。

カフェではアイスコーヒー・ホットコーヒー・アイスティー・ホットティー・ジュース・お菓子を無料で提供しました。これらの材料のほとんどは他のボランティアからの提供や避難所にあった救援物資でした。また一方でカフェにカンパ箱をおき、住民の方からカンパを頂きました。また他のボランティア団体からも寄付をいただきました。

☞活動内容

ボランティアは当日午後５時に来てメニューにあがっている飲み物を作り、カフェのテーブルの飾りつけをしました。運営中は飲み物をいれたり、住民の方や参加者同士でと話をしたりしました。運営を終えると後片づけをして午後９時半頃には避難所をあとにしました。

神戸大学総合ボランティアセンターでは青陽東カフェセクションをつくり、数名の会員を中心に個人会員をカフェ活動にコーディネートしました。センターでは毎週火曜日の午後５時からセクションミーティングを行ないました。

☞活動の終了

カフェ活動は８月２３日をもって終了しました。８月２０日の避難所解消に伴い避難者数が大幅に減少し、カフェ運営が難しくなったこと、また引き続き避難所に関わることが避難住民の方には必要ないのではないかとの判断からこの日をもって活動を終了しました。

☞活動終了後の動き

活動終了後３回の反省会を経た中で、今回の活動を長期的に生かすことを目的として、青陽東養護学校避難所に避難されていた方と文通をしていきたいという意見がでました。そこで一部の元避難住民の方に文通のお誘いをしました。３世帯の方が文通を希望して下さったので、現在細々とお便りの交換をしています。

☞活動を振り返って

活動を終えた後、３回の反省会を開きました。参加者の中には、住民の方の話を聞くことで、少しでも役に立てないだろうかと考えていた人もいれば、ボランティアは空間の提供に努めるだけでいいと考えていた人もいるなど、それぞれの参加者の意識は多様であったことをあらためて知りました。思うに活動期間中にそれを互いに知ることができたならもっと余裕を持って活動ができたのかもしれません。

反省会では運営に関することが多く指摘されましたが、ボランティア活動においてもっとも大切な「活動の目的と実際の活動を振り返るような話し合い」ができませんでした。私たちの関わり方が最初から受け身的であり、またその姿勢を変えれなかったことがこのような話し合いの欠如を生んだと思います。結局、活動中はもちろん活動後にも（その姿勢を今後に役立てていこうという傾向はあるのですが）その姿勢が実際にカフェの活動に与えたその影響を深く互いに話し合うことは殆どできていません。

活動の結果が私たちの目的としたところにかなったかどうかは、カフェの活動では判断できにくいと思います。しかし、活動に参加したメンバーの多くは避難所という特別な空間に足を運び、そこで何かを感じ取ってくれていると思います。また他の活動に参加する際にカフェでの活動を活かして、被災地での活動を効果的に行ってくれることと思います。

・活動日数：３２日間（７月１６日から８月２３日）
・参加人数：１３１人（実人数：２６人）
・報告者：牧巻世

●その他

引っ越しの手伝いや、荷物運びなどの地域住民から直接依頼された活動も少しでしたが行っていました。

◇仮設住宅での活動◇

●灘区仮設訪問

１９９５年６月から１０月の間、灘区にある二ヶ所の仮設住宅、篠原公園仮設住宅と一王山仮設住宅の訪問活動をしていました。

☞活動のきっかけ

きっかけは６月１４日の篠原公園仮設住宅での灘ボランティアの活動に参加したことです。有事の際にスムーズに住民や住民の親戚宅などへ連絡できるようにするために、住民の連絡先を灘ボランティアが把握しようという目的で、住民の方の家に訪問し本人の連絡先や親戚の連絡先をきいてまわりました。そのような活動をした後、総ボラが灘ボランティアから依頼を受けたという形で、毎週水曜日に篠原公園仮設住宅での友愛訪問を始めました。

☞篠原公園仮設住宅での活動

篠原公園仮設住宅は初期の仮設住宅で、障害者や高齢者を優先して入居するようにしているので、友愛訪問では最近の体の調子を訪ねたり、一人暮らしの高齢者の話し相手になる活動をしていました。

☞一王山仮設住宅での活動

６月終わり頃には、大学から近い一王山仮設住宅にも友愛訪問をするようになりました。一王山仮設住宅も高齢者の占める割合が高く篠原公園仮設住宅と同じ様な活動をしていました。

☞篠原公園仮設住宅からの撤退

篠原公園仮設住宅での活動は、７月のはじめから灘ボランティアに登録していた主婦３名と合同でするようになりました。活動をしてみると地元の主婦の方は仮設住宅の近くに住んでいることもあり空いている時間に訪問にいけるという利点があることが分かりました。その上に、仮設住宅に住んでいる方は年を取った方が多いのですが、主婦の方は、私達が何日もかけてやっと打ち解けられたかなと喜んでいることを、はじめていったその日のうちにできてしまうことを目の当たりにしてしまいました。私達学生でしかできないこともあると思いますが、多くの点で仮設の友愛訪問は学生よりも主婦の方が適任ではないか、私達は必要なのだろうかという疑問が生まれてきました。そういう疑問が生まれてきた為に私達は続けるのか、撤退するのかということについて話し合いをしました。その結果、まだ結果を出すのは早すぎるけれど、総ボラの中で活動できる人も少なく活動の継続にも不安があり、篠原公園仮設住宅は主婦の方にまかせて、私達は一王山仮設に専念することにしようということになりました。

☞一王山仮設住宅からの撤退

一王山仮設住宅でも途中から灘ボランティアの主婦の方と合同でまわるようになりました。その後１０月になり夏休みが終わると今までのように昼間に活動できないこともあったので，灘ボランティアの主婦の方に活動を引き継ぎ私たちの活動を終了しました。

・活動日数：８日（6月14日から8月28日まで）
・活動人数：のべ２２人（実人数：６人）
・報告者：服部訓子／牧壱世

❸仮設住宅での日曜大工

仮設住宅改造の活動は、あちこちの団体が行っており、そのいくつかに参加しました。

ただ、仮設住宅改造と言うと、すごく大げさなイメージを僕は持ってしまいます。なぜなら、この活動では、入口の階段の設置や、物干しのひさしを取り付ける程度の事しか行えず、仮設住宅の根本的な問題の解決にはならないからです。

それでも、この活動を通して、仮設住宅の粗雑さ知り、多少でも改善することができたので、活動した意義はあったと考えています。

しかし、活動の中には、住宅の”改良”ではなく”改悪”になるのでは？というものもありました。

そして、その改悪になるのでは？という活動に対して、僕は、なんら否定的な意見を言うことなく、ただ、なんとなくその作業を手伝ってしまったという反省があります。

これは、活動のリーダーが中高年のプロのおじさんなので、若僧の僕は、意見しない方が良いのでは？と勝手に考えてしまったのが原因でした。

・活動日数：１日
・活動人数：１人
・報告者：真中正司

●北区鹿の子台でのイベント

１０月２２日に北区鹿ノ子台第５仮設住宅で行われたふれあいセンター完成記念のイベントに参加しました。このイベントの指揮をとったメンバーの一人が参加のきっかけから活動の報告までをします。

♪活動のきっかけ

私が初めて鹿の子台に来たのは、震災から６カ月経った夏である。直後から本山南小学校に泊まり込みで活動していたボランティアの仲間の友人に、連れていってもらったのがここでの私の活動のきっかけとなった。小学校で知り合ったご老人がやっと当選した仮設住宅が、鹿の子台であった。第五住宅の自治会が開催を通して住民の親睦を図ろうとして、バザーや抽選会を行っていた。その老人の紹介で自治会の会長にお会いして聞けば、鹿の子台はほとんど老人の世帯であり、近所と交流もなく閉じこもりのため他の仮設住宅で起きている「孤独死」をなんとか出すまいと様々なコミュケーションのきっかけを作ろうとしている、とのことであった。そして、もし大学生の若い人たちが来て行事に参加してくれたらどんなに皆さんが喜ぶか、と学生のクラブとの交流を是非にと頼まれた。

♪イベントに向けて

私自身、在校のクラブとは全くつながりがなかったため思案して総合ボランティアセンターのメンバーと相談していろいろな所を訪ねて、ようやく落語研究会の学生に事情を説明して行事に参加してもらえることが決まった。もともと落研は、これまでにも大学の近くの仮設に積極的に活動しにいっていたため、大変好意的に引き受けてくれた。

実は落研の参加が決まったときは既に１０月２２日の秋の行事の一週間前であり、ホッとしたのを覚えている。当初、総ボラ内のカラオケ隊や他のメンバーも試験中での打ち合わせだったこと、遠隔地であることなどの理由から集まりにくく、参加を引き受けたのは皆で決めたこととはいえ時期尚早だったと後悔した。それは、センター内での組織の再構成やこれまでの地元での活動において問題が噴出していたころであったからだ。

でも、せっかく、熱心に協力を申し出て楽しみにしている自治会のかたをがっかりさせたくなかった。（総ボラのミーティングに参加されたり、交通の手配をしていただいた。なにしろ市内とはいえ大学からアクセスのきびしい所であった。）

♪イベント当日

こうして、メンバー集めやカラオケ隊や落研との打ち合わせ、と大変であったが当日は、大盛況であった。秋晴れの空の下でのカラオケ大会や落語の熱演に笑い、喜ばれる方々を見て、私自身が歌ったり話したりしたのではないが、なんだか一緒にやりとげたようなさわやかな心地がした。

ボランティアは気負ってやるのではなく、自分も参加して楽しむことだ。そして、今の自分とは違った立場にいる人の気持ちを考えようとすることから始められることだと気づいた。

・活動日数：１日（１０月２２日）
・活動者数：５人
・報告者：中川裕子

◎大和公園仮設住宅での活動

私達は今、大和仮設という地域型仮設住宅で活動しています。

大和仮設は六甲道駅東側にあり、65歳以上の高齢者、または身体障害者の方を対象として建てられた仮設です。

活動内容は仮設内のふれあいセンターで茶話会、カラオケを月・金曜日の１～５時までやっています。最近は段々暖かくなってきたので、一緒にゲートボールもしています。

私達はそれまでこの仮設住宅を中心に活動していた六甲庵というグループが撤退するという理由から、この大和仮設で11月末から関わるようになりました。

今まで私達が催したイベントは、12月25日のクリスマス会、２月３日の節分です。

クリスマス会はちょうどいいことにホワイトクリスマスになり、かす汁や、さつまいもパイを振舞ったり、ふれあいセンターで茶話会をしたりして楽しみました。

また節分では、合同で活動している松蔭女子大の方が鬼の面や衣装をつくってくれ、僕は鬼の格好をして、みんなで戸別に巻き寿司を配りました。

また、目の不自由な方の付き添い、足の不自由な方のためのお使い、病人の方の付き添いなども行っています。高齢者の方が多いだけに、度々救急車が来ることもあります。

様々な活動を通じて、この仮設の方々は概して「若い」と感じます。実際、「この仮設に老人はいない」とおっしゃる方もいます。

明るく活発で、とても高齢者とは思えない方もいます。そんな積極的な姿を見て、僕は見習うべき点がたくさんあると感じています。

仮設が建ってから一年が過ぎ、建物も段々といたみ始めました。仮設を出て行かれる方も多数出始めました。

だからこれから大変な時期が来るかもしれませんが、仮設の方々儀達を必要としてくれる限り、頑張ります。また色々なことを吸収していこうと思います。

・活動日数：４０日（１１月２２日～３月２９日／現在も継続中）
・活動者数：１１７人
・報告者：石丸努

♤障害者福祉♤

●住友さんの介護（現）

住友さんは、センターができる前に稲村が御影北小学校の避難所で知り合いになり、当初から稲村が毎週木曜日に介護に入っていました。そういった縁で、センターが文学部にあった頃には、よく火曜日の昼過ぎにセンターに来ていました。６・７月には清水・吉田も不定期に活動しています。その後、９月からは吉田が隔週土曜日に定期的に入るようになり、１１月末には服部が空いていた残りの隔週土曜日に入りました。この頃、稲村が活動を月一回ほどに変えています。また、火曜日の介護の人が抜け、センターが学生会館に移ったこともあって、住友さんはセンターに来なくなりました。１２、１、３月には住友さんの周りの人たちの交流会「住友パーティー」を開きました。

・活動日数：４６日（６月１日～３月２３日）
・活動人数：のべ４９人（実人数５人）

●みんなでハッピーキャンプ

95年夏にあった障害者と健常者がいっしょになって行ったキャンプです。社会福祉法人「えんぴつの家」主催。いくつかの地区に分れて数回行われたうちの神戸地区に喜多が参加しました。キャンプの内容としては、テントの設営、キャンプファイヤー、飯ごう炊飯などが挙げられます。

・活動日数：２日
・参加者数：１人

●ボランティア団体「ハビー」の調査活動のお手伝い

聴覚障害者を支援するためのボランティア団体「阪神大震災視覚障害者支援対策本部（ハビー）」が行っていた、避難マニュアル作りのための調査手伝い。聞き取り調査自体は８月１４日から９月３日まで行われていた。
・活動日数：１日
・参加者数：２人

●えんぴつの家に関わる活動

前澤が、野橋順子さんの送り介助をしました。

#障害者セクションの活動を振り返って

この一年の障害者セクションの活動は、住友さん関係の活動がほとんどです。１９９５年１０月に運営局がセンター内に作られた時、活動をある程度まとめるために、セクションが作られました。しかし、実際は１０月当時、活動者が稲村・吉田の二人だけで、二人とも住友さんの介護に入っていました。新しくこのセクションに入る人へのコーディネートについて、他の障害者の人にもコーディネートした方がいいのでは、との意見もありました。しかし、浅く広くよりは一人にたいしてでも責任をもって引き受けた方がいいということ、住友さん以外の障害者の人のことがよくわからないこと、住友さんへの介護者の必要性、何より人数が少なかったということから、まずは住友さんにコーディネートすることにして、それから対象の人数を増やしていこうということになりました。しかし、結局、その後コーディネートできたのは、服部さんが住友さんの所に入ったことだけでした。住友さん一人に対してしかコーディネートできなかったことについて、簡潔に反省点を述べると、

良かった点
①３人のボランティアが全員同じ人の所に行っていたため、ボランティアどうしでの情報交換や相談、レクチャーが比較的やりやすかった。
②「住友パーティー」という形で障害者と学生、障害者関係のひと（ボランティアでない人など）の交流がはかれた。

悪かった点
❶どんな障害者の人がいるのか、介護の種類ややりかた、等など、コーディネートする側に必要な経験・情報・知識をたくわえることができなかった。
❷一人の障害者のことについてしかわからなかったので、他の障害者や障害者一般が抱えている問題が見えにくかった。

#今年度からはこうしたいと思っています。

これらをふまえて、９６年度はコーディネートの仕方を確立させ、しっかりとコーディネートしていくことが、一番大事な目標になると思います。六甲デイケアセンターやその他の団体・学内サークルと協力して（または頼って）いくことが重要になるでしょう。
また、活動していて互いに情報交換したり、解らない事や悩みについて相談したり、何かについての学習をするといったことも必要になってきます。これらのことは、セクションでミーティングをするなどして、解決していこうと考えています。さらに、活動以外での、障害者との交流会も、気軽に参加出来る場として、開いていければいいなと思っています。

・報告者：吉田陵太

注釈

住友さん（本名・住友　智<♂>）

年齢不詳（本人談）の、競馬好きののんきで適当ななおやじです。脳性マヒによる重度の肢体不自由障害を持っていて、体をあまり自由に動かせません。目や耳は達者なのですが、ほとんどしゃべることができないので、文字盤を使って話します。外出する時は車いすに乗ります。現在は六甲アイランドの第四仮設住宅で、６０過ぎのお母さんと二人暮らしをしています。

☆その他の活動☆

●月見山自治会での活動（現）

須磨区の月見山自治会のボランティア活動の手伝い。月見山自治会では、震災以前から、地域のボランティア活動を行っていたが、震災後、しばらく中断していたのを、神戸大学の学生も交えて再開。日曜大工、老人ホームへの訪問、お祭りの手伝いなど活動内容は多様。現在も月に１回程度の割合でつながりを持っている。
・活動日数：５日（６月１８日～１０月１５日）
・参加人数：のべ１２人（実人数９人）

●カラオケ隊のお手伝い

カラオケ隊の活動は、”くまさんの炊き出し隊”の矢野さんからの呼びかけにより、”くまさん～”と総ボラの共同主催という形で６月の中旬から始められました。（後に”カラオケ隊”と改称。）

灘区を中心とした各地の避難所でカラオケ大会を行うことによって避難者の方々に和んでもらい、お互いの結束を高めてもらおう、また、ボランティアはその活動を通して、避難所の様子や避難者の方々の心境を知ろう、というのが活動の主旨です。

実際の活動内容は、その会場によって少しずつ異なります。音楽室や一般の教室などを借りて、こじんまりと行った場合には、自然とアットホームな雰囲気となり、ボランティアも住民の方々と話をしたりしながら、共に楽しむことができますが、運動場など、広い場所でやる場合には、リクエストの受け付けや司会、機械操作などの運営作業で手一杯となってしまいがちです。また、その時や場所の状況によって、目的も少しずつ変わります。仮設住宅の割り当て発表を目前に控えた避難所では、住民の方々の神経も高ぶっていましたから、みなさんの心を和らげるのが第一目的でしたし、住民同士の結束を高めることを最優先に考える場合もあります。現在では仮設住宅の”ふれあいセンター”などが主な活動場所となっていますが、そのような所では知らない人同士をつなげてコミュニティ作りのきっかけとなることを目的としています。

♪活動を振り返って

これらの目的を参加するボランティアの間で共有したり、実際の活動内容を前もって確認するための事前の打ち合わせや、その活動結果を次回以降に活かすための反省会が、あまり行われなかったことは、反省すべきことでしょう。また、これまでは矢野さんのお伝いといった感じで、ほとんど頼り切っていましたが、これは、イベントボランティアの丿

ウハウを知る絶好の機会でもあるのです。今後は、カラオケだけでなく、イベントボランティアセクションとして、より充実した活動を行えるように、みんなで頑張っていきましょう。

活動日数：
活動人数：のべ３３人
報告者：四の宮昇

●灘区ボランティアセンターのお祭り

このお祭りは、８月２７日に稗田小学校のグランドで開催されました。

このお祭りは、灘区内にあるボランティア団体が集まって交流を持ち、一緒に灘区を盛り上げましょうということを目的に灘区のボランティアセンターが開催したものです。灘区にある７つほどのボランティア団体が参加し、たこ焼き屋やカレー屋やかき氷屋などをそれぞれが出して避難者の方に楽しんでもらおうというものでした。そのほかにコンサートやカラオケ大会などが行われました。

私達総ボラはくまさんの炊き出し隊という炊き出しボランティア団体の矢野さんという方から依頼されて、その方たちのお手伝いをするという形で参加しました。灘区役所の中のボランティアセンターで参加団体による打ち合わせがなされたのですが、その段階から参加させてもらいました。当日の総ボラからの参加人数は８人、そこで子供向けのゲームのお手伝いと、カレーの炊き出しのお手伝いをしました。お祭り自体はたくさんのひとが来て下さって成功したのではないでしょうか。

◎たくさん残った反省点

しかし、私達には多くの反省すべき点が残りました。まず、何のためのお祭りなのかということを参加者一人一人がきちんと自覚していなかったために、ただの労働力になってしまっていたということです。イベントをするということがどういうことか分かっていなかったために、何をしたらいいのかさっぱり分かっていなかったこともあります。これはイベントをほとんどやったことがなかったので仕方なかったのかもしれません。

最大の反省点は学生が固まってしまい一緒にやっているはずのくまさんのたきだしたいの方（皆さん社会人です。）とあまり打ち解けることができなかったということです。せっかく一緒に行動できる機会だったのに私達は閉じていて交流できませんでした。こんな反省ばかりの活動でしたが、失敗は成功のもと！の心意気で、これからは自分と違う世界に属している人でもこわがらずに、本音で関わりを持っていきたいと思っています。

活動日数：１日（８月２７日）
活動者数：７人
報告者：服部訓子

●アルジェリアテントの設営

「アルジェリアテント」それを聞いて皆さんは何だろうととお思いになるでしょう。

アルジェリアテントとは、その名の通り昨年の阪神・淡路大震災のとき、アルジェリアから救援物資として神戸市に寄贈されたテントです。六甲祭のとき展示したのでご存じの方もいるでしょうか。ちなみに「アルジェリアテント」とは通称であって、正式名称は分かりません。

アルジェリアテントの広さは、約畳30畳、主に仮設住宅の自治会やイベントなど、住民同士のふれ合いを保つ重要な場所として使われます。

神大総合ボランティアセンターが他団体と協力してこのテントを建てた場所は、ポートアイランド第二・五仮設、兵庫・西区の仮設、そして灘区の大和仮設です。

特に私達が初めて主体となった大和仮設での設営は困難なものでした。

朝十時から始めて、日中日差しの照りつける中、夕方四時くらいまでかかりました。途中、水分を補給しなければ脱水症状を起こす程の暑さで、立ちくらみもしました。やっとの思いでテントを建て、雨対策で周りに溝を掘りました。またビールのケースや畳（大和仮設ではやっていない）をもってきて、座敷のようにしたりしました。しかし、もともと接合部分が甘かったので、骨組みがずれたり、雨の重みでテントがつぶれたり、強風で吹き飛んだりしました。

大和仮設においては、建てて一週間後にすぐ解体が決定しました。それは行政がふれあいセンターを建てることに対して重い腰をあげたからでした。自分たちの建てたテントがすぐになくなってしまったのは悲しいことですが、こういう形で仮設の方々にお役にたてたことをうれしく思います。

私達はアルジェリアテントを建てることはないでしょうが、つらくともなんとなく楽しい活動でした。

・活動日数：５日間（７月２日～９月１日）
・活動人数：のべ１６人（実人数７人）
・報告者：石丸努

●文通ボランティア

文通により交流をはかることを目的に開始。９５年秋から、「カフェ・ツモロー」などの様々な活動を通じて知り合った人と文通している。

●復興祭のお手伝い

神戸大学学生震災救援隊が６月４日に六甲八幡神社で行った復興祭に当日のスタッフとして参加。会場整理、パンフレットの配布、救援隊の模擬店の手伝いなどをした。

・活動日数：１日
・活動人数：３人

●その他

その他にバザーを開いたり、引っ越しのお手伝いをしたり、大和公園仮設住宅のお祭りに店を出し利しました。

特にバザーやお祭りは灘区で活動していた六甲庵という、お坊さん達がやっていたボランティア団体にお世話になりました。六甲庵の縁で現在も大和仮設住宅で活動を続けています。

第３章

研究活動の報告

神戸大学総合ボランティアセンターでは学問と社会貢献を両立させ、様々な方面における各種の研究と本学学生の社会貢献への意欲を地域社会に結びつけようと試みようと考えています。
そこでボランティア活動を通して自己の問題としてとらえた社会問題を学問的に研究していくよう活動しています。
この章ではこの１年間の研究活動について報告します。

この１年間で次のような研究活動を行いました。

共同研究会

５月２３日から７月１１日まで毎週火曜日に，センターのボックスで学生を中心に共同研究会を開いていました。ボランティア活動を通じて個々人が興味を抱いた問題について発表したり、様々な活動をしている他団体の方を招いて私たちの知ることのない現場や問題についてお話をしていただきました。

第１回共同研究会は避難所でボランティア活動をしていたメンバーが「避難所でのボランティアから見えた問題点」と題して，主に避難所自治についての問題点について発表し，それについてメンバー間で話し合いました。

第２回共同研究会は灘区避難所連絡会に参加していたメンバーが「灘区避難所連絡会の活動経験」をテーマに連絡会の存在意義や現状、これからの方向性について発表しました。

第３回はコープこうべの福祉活動推進員である林律子さんを招いてボランティアコーディネート業務についてお話しをしていただきました。

第４回と５回目は灘区避難所連絡会から戸嶋凡兵さんを招いて、震災後数カ月をへて、今なお解消されない避難所の抱える問題について、写真などを交えて説明して下さいました。

第６回は子供の心のケアのためのＮＧＯ「楽楽」の堀直子さんを迎えて楽楽の発足のきっかけや活動内容を通して子供の心のケアを行うボランティア活動についてのお話を聞きました。

シンポジウムの開催

６月２６日と２７日に「仮設住宅をもっとよく知りたい！」と題して神戸大学総合ボランティアセンター主催のシンポジウムを開催しました。

２６日は神大工学部の室崎益輝教授の「仮設住宅の構造上の問題を考える」ということで，応急仮設住宅と制度の問題や雲仙などとの比較や仮設住宅の問題点を指摘し、仮設住宅のあり方を考えるものでした。

２７日は「ボランティアが仮設住宅にどう関われるか」ということをテーマにちびくろ救援ぐるうぷの村井雅清さんと神大発達科学部の城仁士教授を迎えて行いました。村井さんからは、実際に仮設住宅で活動しているボランティアの視点から、様々な問題提起が行われました。

また城先生からは、「被災地の心の問題」に付いて、実際に被災地で行われた調査に基づいた発表がありました。

総ボラゼミ

アドバイザー委員の先生を招いて行う自主ゼミを行いました。ゼミの目的はボランティア活動自体や、それに伴ってくる様々な問題・事象を学術的に捉えることです。

＜第１回＞

１１月１６日に渥美公秀先生を迎えて行いました。渥美先生は文学部で社会心理学を専攻されているので、ゼミのテーマは「社会心理学者が見た阪神大震災」で行ないました。

＜第２回＞

１２月２０日に三上剛史先生を迎えて行いました。三上先生は国際文化学部で社会学を専攻していらっしゃいます。ニュースレター第２号の”アドバイザー委員を訪ねて”をふまえて、「おまえら何でボランティアやっとんねん～ボランティアの社会学的な位置や理念を考える」というテーマで自主ゼミを行いました。

これらの自主ゼミの詳しい内容につきましては、それぞれニュースレター第２号、第３号で報告を行っておりますので、そちらをごらんください。

小さな勉強会

小さな勉強会とはボランティア活動を通して、また日常の経験を通して社会の問題に対し感じたことや考えたことを学生同士で気軽に話し合う勉強会です。勉強会という名が付いているのでそれなりに本などで下調べをするようにしていますが，基本的には自由な形で行うことにしています。

○昨年度を振り返って、今年度からは次のようにしていこうと思っています。

共同研究会について

ボランティア活動といっても様々な活動があり、自分の参加していない活動について知る機会はあまりありません。そこで、活動の種類に関わらずメンバーが一つのところに集まり，発表の内容について話し合うことは（特に他団体の活動者を呼んで行ったことは）総ボラのメンバーに大変刺激になっていました。ただ話をしに来ていただいた方たちは当時の中心メンバーのつてで来てもらっていたので、彼らが活動に関われなくなった夏以降は行えなくなりました現在の活動量を考えると週に１回の共同研究会を復活させることは無理ですが、月に１度くらいのペースでもう１度始めてみたいと思っています。

シンポジウムについて

６月のシンポジウムには学生よりも、大学関係者や学外のボランティア団体の人々が熱心に聞きにきてくれていました。その後の開催の予定もあったのですが、シンポジウムを組織する力量のあるスタッフが忙殺されていたため、ついに昨年は再び行えませんでした。

シンポジウムの参加者の一人が最後に感想を述べる場面で「大学の先生方がこうして無料で我々に、普段は大学の中に閉じこもりっぱなしになる知識を解説してくれる機会を設けてくれたことはたいへんに嬉しい。」と語っていました。

このようなシンポジウムに対するニーズはまだまだあると思われます。ボランティア活動のコーディネートをする部門とは別に、このようなシンポジウムを企画する部門を大学院生などを巻き込んで成立させ、「市民に開かれた大学」をめざすための組織的基盤を整備することが今年の課題となるでしょう。

総ボラゼミについて

１１月と１２月に開いた総ボラゼミは、企画が先行していたので、必要に応じてテーマを設定し、事前の勉強会をするべきだったと思います。またせっかくアドバイザー委員の先生を迎えているのに後につながるような（ボランティア活動や勉強会など）ゼミになりませんでした。これからは日々の活動とつながりの感じられるものにしたいです。また各回のゼミの内容を終了後に学生の間だけでも考える機会を持つべきだと思いました。

小さな勉強会について

あまりたくさん開きませんでしたが、どの回も仲間内で楽しくかつ深く意見の交換ができました。「開かれたセンター」であるので，内輪の企画はあまり好ましくありませんが，他団体のメンバーを呼んだり個人会員に声をかけてできるだけオープンなものにするようにつとめています。

今年からはボランティア活動をしていて思ったこと、知りたいと思ったことを活動している人達がセンターに持って帰ってきて、小さな勉強会を開くことで、多くのメンバーと話し合う機会を持ってくれるよう働きかけていきます。